

彼此これを對照せば、興味は如何であらうか。

九

偶感的に述べ來つた吾人は、更に特に「眼藏史」の研究を主張する、眼藏編纂の史的經過は勿論であるが、眼藏中に反映せる時代思潮や、其他の教學との影響を分析解剖しつつ、これに史的敘述を試みることは、決して容易の業では無いが、宗門人として逸し得ざる聖業である。

一〇

宗乘の史的研究と云ふ限られたる部門ですら既に斯の如くであるから、宗乘の各方面に於ける研究事項は、殆んど擧ぐるに違なき程であらう。

我が「實踐宗乘研究會」は、名實相應に、或は學的に、或は實踐に、會員諸君の精進辨道は、必ずや立派な成果を示すことゝは思ふが、愈々益々奮勵努力して、いやが上にも兩祖の家風を宣揚すると共に、宗乘に關する各種の問題に就て着々研究の實を擧ぐるやう希望してやまぬ次第である。

道元禪師の佛陀觀

忽滑谷快天

大般涅槃經第二十七師子吼菩薩品に云く、『一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易』と。如來は常住不變なり、この如來は即ち佛性なり、如來といひ佛性といふ共に一物の二名なり。敎家の三因佛性の談と同じからず。佛性即如來なれば宇宙萬象皆佛性ならざる無し。故に正法眼藏佛性卷に云く、『この山河大地みな佛性海なり』、『しかあれば草木叢

林の無常なるすなはち佛性なり、人物身心の無常なるこれ佛性なり、國土山河の無常なるこれ佛性なるによりてなり阿耨多羅三藐三菩提これ佛性なるがゆるゑに無常なり、大涅槃これ無常なるがゆるゑに佛性なり』と。如來常住無有變易なれば、佛性常住無有變易ならざる可らず、所謂常住とは固定不變なるにはあらず、刹那刹那に生滅して永劫活動するを謂ふなり、換言すれば永劫の無常これ佛性の常住にして永劫の生命これ佛性の常住なり、如來の常住なり。山河大地、草木國土、何れか無常ならざる者あらんや、其無常なる所以は生命あるがためなり。宇宙萬有は一如來の生命海なり、故に正法眼藏如來全身卷に云く、『この三千大千世界は如來全身なり』と。御抄に釋して云く、『此大千世界則佛體也』と。御聽書抄に釋して云く、『三千大千世界は佛の身命也』と。如來の周徧法界なる誰か之を疑はんや。

周徧法界の如來は唯一佛なり、諸佛にあらず多佛にあらず、一切諸佛の名ありと雖も多佛あるにあらず、唯一佛のみなり。楞伽經に云く、『佛、大慧に告ぐ、我、此娑訶世界に於て三阿僧祇百千の名號あり、愚夫悉く各々我が名を説くを聞て、而も我如來の異名なるを解せず』と。十方諸佛の名を聞て十方世界に一一別別の佛ありと執する者は愚夫なり。永嘉云く、『一性圓に一切の性に通し、一法徧く一切の法を含む、一月普く一切の水に現じ、一切の水月、一月に攝す、諸佛の法身、我性に入り、我性、還て如來と合す』と。如來即ち佛性、佛性即ち一性なり、一性は圓かに一切の性に通じ、一法は徧く一切の法を含む。如來は圓一切性なり、徧一切法なり、如來は一月なり、而も普く一切諸法の水に現じ、一切の水月は如來の一月に攝せらる、諸佛の法身は一切衆生の性に入り、一切衆生の性は還て如來と合して一なり。所謂法身とは佛性の異名なり、諸佛の法身即ち一切衆生の生命なり、三千大千世界の生命なり。されば佛性と衆生と二あるにあらず、衆生中に別に佛性あるにあらず、佛性即衆生なり。大般涅槃經第三十五卷に云く、『若し衆生の中に別に佛性ありと言はゞ、是の義、然らず、何を以ての故に衆生即ち佛性、佛性即ち衆生なり』と。果して然れば宇宙人生、何物か如來の暖皮肉ならざらんや。正法眼藏傳衣卷の御聽書抄に云く、『諸法を諸法とみるは世間の迷なり、是をやがて實相といふべからず、諸法を佛のごとくしるときこそ實相なれ』と。萬有の相を見て萬有なりとするは世間の迷情なり、これ如實の相にあらず、萬有は唯、佛なりと見るとき、如實の相に達

するなり。

正法眼藏行佛威儀卷に云く、『諸佛かならず威儀を行足す、これ行佛なり』と。面山の聞解に之を解して云く『諸佛とは、横十方、豎三際の佛を指す』と。乃ち諸佛とは多佛にあらず、空間的には十方に亘り、時間的には過現未に通ずる、佛を指す。這箇の佛は行あり住あり坐あり臥あり、進あり退あり、去あり來あり、活動あり妙用あり、生あり命あり、故に死物にあらず。行足すといふは、明行満足するをいふ。明は智なり、智なくして行のみならば开は妄行なるべし、行なくして智のみならば开は空智なるべし。『智と行と佛に於ては一なり、佛は宇宙智を具し、宇宙行を行す、これ行佛なり。佛行は一切行なり、故に正法眼藏唯佛興佛卷に云く、『佛の行は盡大地とおなじく行ひ盡衆生とともに行ふ、もし盡一切にあらぬはいまだ佛の行にてはなし』と。佛行は一切行なり全宇宙とともに行ふ。故に行即佛なり、行佛とは全宇宙即生命なり活佛なり。宇宙の活動即ち宇宙的實在なり、實在の佛と活用の行と二あるにあらず、體用何ぞ二あるべけんや。行即佛なり故に行佛といふのみ。

正法眼藏行佛威儀卷に云く、『行佛それ報佛にあらず化佛にあらず』と、敎家に三身の説あり、所謂法身報身化身これなり、『報佛にあらず』とは、行佛は報身佛にあらずとなり、報身は過去行因の報として得たる智徳圓滿の佛身なり、智徳圓滿の妙身は三祇百劫の行因を要す。これ理想的人格にして、一種の空想のみ、實在の佛にあらず、行佛は活佛なり、現實の宇宙萬象として實在する活佛なり、之に反して理想的人格は空想に存するのみ。これ『行佛それ報佛にあらず』と、斥けらるる所以なり。化身は變化身なり、所謂千億化身釋迦牟尼佛なり、化身は衆生の機に應じて變化す、故に應身ともいふ。應化は影像の如し、本佛にあらず、行佛は本佛なり、影像にあらず。歴史的なる釋迦佛は人間に應化せる影像なり、本佛にあらず。これ『化佛にあらず』と斥けらるる所以なり。

果して然れば行佛は三身中の法身なりや、謂く然らず。敎家の所謂法身は理佛にして行佛にあらず、活佛にあらず死佛なり、故に説法者にもあらずと説けり。行佛豈死佛ならんや。行佛卷に云く、『行佛は自性身佛にあらず他性身佛にあらず』と、自性身佛は法身佛なり、他性身佛は應化身なり、されば行佛は法報化三身の攝する所にあざること

とを知るべし。金剛般若論に云く、『報化非眞佛、又非說法者』と、此論は法身を以て眞佛となし、報化二身を以て眞佛に非すと爲す。これ法身説法を主張する所以なり。黄蘗希運の傳心法要に此説を反覆し、法身の本佛たるを曉せり。黄蘗の識見は古今に卓拔す、而も道元禪師は法身をも斥けて『自性身にあらず』といひ、本佛は行佛なり活佛なりと直指せり、思はざるべけんや。

また敎家に四身十身の談あり、四身とは法身、報身、應身、化身なり、十身とは菩提身、願身、化身、力持身、相好莊嚴身、威勢身、意生身、福德身、法身、智身、これ行の十身なり、衆生身、國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身、これ解の十身なり、平等身、清淨身、無盡身、善修身、法性身、離尋伺身、不思議身、寂靜身、虚空身、妙智身、これ十地にて得る所の十身なり。密敎に四種法身の説あり、一に自性法身、これに二あり、理法身智法身これなり、二に受用法身、これに亦二あり、自受用法身、他受用法身これなり。三に變化法身四に等流法身これを四種法身といふ。

之を要するに四身といひ、十身といふと雖も、其内容は即ち法報化の三身に他ならず、法身は體、報身は相、化身は用、三即一にして一即三ならずんばあらず、即一の佛身これ本佛なり活佛なりとす。

正法眼藏行佛威儀卷に云く、『しるべし諸佛の佛道にある、覺をまたざるなり、佛向上の道に行履を通達せること唯行佛のみなり』と、諸佛の佛道にあるや覺を待たずとは、敎家の常談と同じからず、佛陀を翻じて覺者となす、故に佛といへば即ち覺を待つと思へり、然れども本佛は本來成佛にして覺を待たず、刹那の修成すら待たず、況や三祇百劫をや。世界國土有生無生、皆佛身なり、故に正法眼藏古佛心卷に云く、『いはゆる世界は十方みな佛世界なり、非佛世界いまだあらざるなり』と。活佛は十方世界に其行履を七通八達せしむ、故に日月の運行、四時の變化、草木の榮枯、人物の浮沈、世界の成壞、一として佛光の片々たらざるなし。

また行佛威儀卷に云く、『この行佛は頭々に威儀現成するゆゑに、身前に威儀現成す、道前に化機漏泄すること、互時たり互方なり互佛なり互行なり』と。這箇活佛は事々物々上に其威儀を現はし人をして其妙容を見せしむ、佛誕

生以前、無始より以來、佛の威儀現前し、佛成道以前、久遠劫來、佛化の機用常に現はれ、古今に互り、十方に亘りて佛行の活用なきこと未だあらざるなり。佛身の無邊際なるは小乘大衆部すら既に之を認む、況や大乘をや、況や心宗をや。佛壽も亦是の如し、天桂云く、妙法華經壽量品、如是我成佛已來甚大久遠、壽命無量阿僧祇劫、常在不滅、本行菩薩道、所成壽命今猶未盡。甚大久遠盡未來際、唯此一生而無、初中後三世變易、如來常住 無有變易、是謂不生不滅一生。古賢の言ふ所、是の如し、何ぞ信受せざる可んや。

見佛の卷に云く、『如來の神力、慈悲力、壽命長遠力、よく心を拈じて信解せしめ、身を拈じて信解せしめ、盡界を拈じて信解せしむ』と。所謂如來の神力は宇宙智にして凡慮の測度すべきにあらず、是れ神力といふ所以なり、所謂慈悲力は宇宙愛なり、所謂壽命長遠力は無限の生命なり。斯の如き如來は深信により深解により、信解合一して正に體驗すべきなり。

布教の豫件

上 野 舜 穎

宗教の第一義性は固より自己内心に於ける深き體驗にありと雖も只其の體驗内容を自ら受用するのみにては遂に特殊宗教としての意義を失ふに到るべし。必らずやこれを一般に擴充し、苦界に沈淪せるものを救ひ、未だ解脫せざるものを解脫に導かざるべからず。若し釋尊にして只菩提樹下に於て道を成じたるのみにて憍陳如以下の五比丘等に理想實現への道を示し給はずんば遂に世界宗教としての佛教も亦無かりしならん。然れば則ち布教は宗教に取つて重要な使命を果すものと言はざるべからず。茲に於てか、實踐を基礎付くる教義信條を必要とし、是によつてそれが使